

〈資料〉

久米島方言のアクセント資料（5）

—具志川方言—

上野善道

1. はじめに

沖縄県島尻郡久米島町方言のアクセント調査報告の続きとして、今回は旧具志川村の具志川（ぐしかわ、方言ではグッ[チャ]ー。音調記号は後出(3)を参照）方言を取り上げる。具志川集落は、125年ほど前に具志川城跡のところから今の場所に移住したので、[ミー]ジマ（新島＝新集落）とも呼ばれる。隣の仲村渠（なかんだかり、ナー[カ]ノー）とまとめてグッ[チャーナーカ]ノーとも呼び、両方言は類似しているという。この具志川方言を対象に、具体的には、本誌前々号拙論(2020a)の旧仲里村の真謝（まじゃ）方言、前号拙論(2020c)の旧具志川村の嘉手苺（かでかる）方言と同じく、固有名詞（地名・人名＝名字）を前部要素とする生産的複合語のアクセント資料を提示し、それに基づく考察をする。

話者は(1)の方である。

(1) 久米島町具志川 宮里洋一（みやざと よういち）氏、昭和13年¹生まれ

この方言のアクセントについては、同じ話者にに基づき、本誌掲載の拙論（2019a）では4モーラ語までの主要な型が反映されると考えた基本的な単語とそれにいくつかの助詞の付いた例を、拙論（2019b）では、類別語彙を中心に、6モーラ語までの追加語彙の例を掲げた。那覇方言語彙を調査した報告も印刷中(2022)である。拙論以外の研究は知らない。

拙論（2019a）から2～4モーラ語の主要な型を(2)に示す（「一人」は2019bに依る）。ここからは、2モーラ語から順に3種類、3～4種類、4種類の型の存在が見えてくる。

(2) 項目	単独	+が	項目	単独	+が
血	[チー	[チー]ガ	鼻	[ハナ	[ハナ]ガ
目	ミ[ー	ミ[ー]ガ	花	ハ[ナ	ハ[ナ]ガ
前	[メ]ー	[メ]ーガ	一人	[ツ]イ	[ツ]イガ
煙	[キブ]シ	[キブ]シガ	糯米	[ムチ]グミ	[ムチ]グミガ
刀	カ[タ]ナ	カ[タ]ナガ	風呂敷	ウ[ツ]クイ	ウ[ツ]クイガ
今年	ク[ン]ドゥ	ク[ン]ドゥガ	苦瓜	ゴ[ー]ヤー	ゴ[ー]ヤーガ
黒	ク[ル]ー	ク[ル]ーガ	頭	チン[ブル	チン[ブル]ガ
鉄	ハサ[ミ	ハサ[ミ]ガ	母	アン[マ]ー	アン[マ]ーガ
糸	イ[チュー	イ[チュー]ガ	鋸	ヌク[ジリ	ヌク[ジリ]ガ

1 拙論（2019b）では、話者の生年を昭和8年と誤ってしまった。別に昭和8年生の話者がおり、宮里氏が昭和13年8月であったことから混乱したもので、お詫びとともに慎んで訂正する。

2. 項目と表記

生産的複合語を用いた一連のアクセント調査は、複合語アクセント規則の概要と、体系把握に必要な長い単語のアクセントを知るために試みている。和語同士の複合語は、組み合わせがどうしても限られるからである。

生産的複合語の前部要素は、人名はその地域（久米島では沖縄県）に多いものを中心にモーラ数を考慮しながら選び、地名も地元の各集落名を網羅するとともに全国の都道府県名を取り入れた。

一方、後部要素は、和語でこれらの前部要素に自由に付く例を探すのは大変で、例えば「豆、味噌」などがその地の特産としてあったと仮定して順番に組み合わせて答えてもらうとしても、その語例を揃えるのが容易ではなく、ここも漢語が多くなってしまった。漢語は創作複合語になることが多い上に、今では漢語も日常生活にかなり入っているとは言え、伝統的方言ほど馴染んでいないことは否めない。加えて、そのアクセント型が調査地によって異なり、型を網羅した広範囲に使用できる調査表を作るのは困難を伴うという問題は残る（今回は後部要素の型に欠落が目立つ）。

項目の馴染み度の観点では、都道府県名は、島の人々のそこの関係のあり方や、個人の生活によっても異なる。今回の例で言えば、「名古屋」は馴染みがあって語音も[ナグ]ヤと言うが、それを含む県名の「愛知」になると日常語ではなくなり、アイ[チだが、[アイ]チかと迷ったりする。「大阪」はよく話題になるが、「京都」はぐっと少なくなり、「京」（京言葉など）はまず使わないという。離島名も、沖縄本島の離島名は方言で自然に出るが、南琉球になると、「宮古」や「石垣」などは宮古島、石垣島を含む周辺一帯を指してよく使うものの、その小さな離島は答えが得にくくなる。県が異なる鹿児島県の奄美地方は、大島を中心とする「奄美」は言うが、喜界島になると使用度は落ちて「喜界島言葉」などの聞き出しが難しくなる。これらの稀用語で発音の揺れる例は、紙幅の関係で別表では割愛した。

前部要素と後部要素の組み合わせによっても語音が変わり得る。沖縄の人名は方言の発音が自然に出るが、学校でよく使う「〇〇先生」になると標準語的な読みになるのが普通で、「先生」も今風にセンセイになる。その場合でも、モーラ数が同じである限りアクセントまで異なることは一般的でないので、その点にはこだわらず、他項目の場合も含め、話者に任せて答えるままに記録し、方言形の発音を逐一確認することはしなかった。「八重山」の[イエー]マが、「八重山名物」などでは口蓋化が少なくなって[エー]マ〜となる例もあった。繰り返し現われる前部要素は、一度通しで聞いてそれをそのまま繰り返し記入し、必要に応じて他の形も確認して補足するに留めた。その結果、同じ行に出て来る複合語とその前部要素とで語音が一致しないこともあるが、その点は本稿の主題ではないので、そのままとした。「製品、名物、先生」などの-eiは-e:とも実現するが、これもこだわらなかった。

ただし、これらの細部よりも、具志川方言の生産的複合語のアクセント調査は、時間の関係で途中で終わったため残りの補充と確認を予定していたものの、コロナ下においてそ

れも叶わず、中途段階での報告とならざるをえなかった方が問題である。また、具志川方言は音調の揺れがかなり観察され、それらの“揺れが聞こえなくなる”レベルまでのアクセント体系の把握には至っていない。記録に[?]を付したままの項目も一部ある。補訂の機会を待つ。

語音はカナ表記とし、音調記号と状況符号は(3)を用いる。

- (3) [:上昇,]:下降 ([を挟まずに]が2つあるのは二度下がり)。<m>:稀, <o>:古, <普>:こちらが普通, <x>:この形なし, (OK):確認済みでこれで可, [?]:要確認。

3. 複合名詞のアクセント

3.1 データ

調査資料は別表に掲げる(紙幅の都合で後部要素は略式表記した)。詳しくはそれを参照されたいが、ここではそれを大きくまとめて示し、それを元に考察をする。

現段階で資料が集まっている後部要素の例は(4)で、長い順に揃えた。前部要素に頻出する○[○]○○型はここでは得られず、(2)に挙げた○○[○]○, [○○]○, さらには別の調査で得られた[○]○○([ティ]ーチ《1つ》, [トゥ]ミティ《早朝》)なども欠けている。

- (4) [○○]○○(研究, 製品, 名物, 先生), ○○[○○](銀行, 組合, 新聞, 新報, タイムス, 民謡); [○○○]²(旅行), ○[○]○(文化, みやげ, 料理, レモン, 言葉); [○○(口); [○]([ツ]《人》³)

前部要素は、語例がそれなりに揃う4モーラ語以下をモーラ数別に示すと(5)となる。

- (5) 4モーラ語: [○○]○○(鹿児島, 教頭), ○[○]○○(アメリカ, 校長), ○○[○]○(広島, 琉球, 年寄り), ○[○○○](オランダ);
3モーラ語: [○○]○(名古屋, 内間, 宮古), ○[○]○(与論, 福井, 高知), ○○[○](池間, 田里)
2モーラ語: [○○(名瀬, 比嘉, 堂(どう)=集落名), [○]○(奥武(おう)=集落名), ○[○(島, 伊波, 唐(とう)=国)

以上を組み合わせた結果から主要なものをまとめると(6)となる(語音の細部は不問)。

2 この型の語例は少ないが、他に[カツー] (鯉) があり (これは島内5地点とも同じ)、複合語でも[カツー] ブシ (鯉節) となる。外来語では[ギター], [マナー] がある。「旅行」の助詞付き形は未確認であるが、同じく[リョコー]ガであろうと推測する。これらは、[○○]○型の○○ー構造における音声変種の可能性が高いと見るが、ここでは安全を期して別扱いとしておく。なお、その一つ後に出る[クチ(口)も、(2)の例から[クチ]であろうと考える。

3 この1モーラ語は2モーラ語から音変化によって生じたものである。以下、直前に想定される形を取ってカナで記すと、*[ヒト] > [ツ]であり、他に*[シタ] > [チャ] (下) がある。1音節2モーラ語で長音以外に終わる希有な例の[ツ]イ (一人) ——長音終わりの例なら[マ]ー (どこ), [ダ]ー (おまえ), [ヌ]ー (何), [キ]ー (今日), [ワ]ー (豚) 等がある——や、3モーラ語で第1モーラのみが高い[ティ]ーチ, [トゥ]ミティも、それぞれ*ヒ[トリ], *ヒ[テ]ーツ (cf. ヒ[ト]ツ), *ツ[ト]メテから第1音節母音の無声化を介した融合短縮によって生じた形と見る。

(6) 前部要素	複合語	同じ振る舞いをする後部要素
[カゴ]シマ	[カゴ]シマメイ]ブツ	名物, 研究, 製品, 先生 (以上 [〇〇]〇〇); 銀行, 組合, 新聞, 民謡 (以上 〇〇[〇〇])
ア[メ]リカ	アメ[リカメイ]ブツ	
ヒロ[シマ	ヒロ[シマメイ]ブツ	
オ[ランダ	オ[ランダメイ]ブツ	
[カゴ]シマ	[カゴ]シマリョ]コー	旅行 ([〇〇〇]); レモン, 言葉 (以上 〇[〇]〇)
ア[メ]リカ	アメ[リカリョ]コー	
ヒロ[シマ	ヒロ[シマリョ]コー	
オ[ランダ	オ[ランダリョ]コー	
[カゴ]シマ	[カゴ]シマミヤ]ギ	みやげ, 文化, 料理 (以上 〇[〇]〇)
ア[メ]リカ	アメ[リカミヤ]ギ	
ヒロ[シマ	ヒロ[シマミヤ]ギ	
オ[ランダ	オ[ランダミヤ]ギ	
[イシ]ガキ	[イシ]ガキグチ	口 ([〇〇, 言葉の意), 前部はすべて地名
ヤ[マ]ザト	ヤマ[ザトグチ	
ナカ[ザト	ナカ[ザトグチ	
ヤマ[ト	ヤマ[トグチ	
ア[ー]カ (阿嘉)	アー[カグチ	
[ドー (堂)	[ドー]グチ	
[オー (奥武)	[オー]グチ	
ト[ー (唐)	ト[ー]グチ	
[カゴ]シマ	[カゴ]シマケン	県
ミ[ヤ]ザキ	ミヤ[ザキ]ケン	
オー[イタ	オー[イタ]ケン	
コ[ー]チ	コー[チ]ケン	
[ミエ	[ミエ]ケン	

3.2 後部4モーラ語の場合

まず, 後部4モーラ語は, [〇〇]〇〇であろうと〇〇[〇〇であろうと, 等しく-〇〇]〇〇となる。前部要素は, 最初の2モーラのみが高い型は, それを保持したまま後部が-〇〇]〇〇となって続き, [カゴ]シマメイ]ブツのように二度下がる。これはほぼ規則的だが, 稀に「鹿児島銀行」のように, 規則形との併用でカゴ[シマギン]コーも出る例もある(後述)。

興味深いのは, 第2モーラのみが高いア[メ]リカと, 第3モーラから語末まで高いヒロ[シマが, 複合語になるとその区別を失い, とともに第3モーラから上昇するアメ[リカメイ]

ブツ、ヒロ[シマメイ]ブツとなる点である。これは極めて規則的で、先取りして言うと後部要素を問わず起こり、ヤ[マ]ザト(山里)とナカ[ザト(仲里)に言葉・方言を意味する「クチ(口)」を付けた場合でも、ヤマ[ザトグチ、ナカ[ザトグチとなって、両者の対立は失われる。

そうすると、オ[ランダに対するオ[ランダメイ]ブツの扱いが問題となるが、これは第3モーラが撥音であるため、他にもヨ[ロンメイ]ブツ(与論)や、すでに単純語扱いとなっているであろうがナ[カンダ]カリ(仲村渠=集落名)もある。これらは、第2・第3モーラで1音節を形成しているためと解釈できることから、ヒロ[シマメイ]ブツと音韻的には同一の型の音声変種と認定される。低く始まり、第3モーラが長音(一)で第2モーラと1音節をなす該当例にはワ[カーセン]セイ(若先生)がある。その一方で、マ[ガ]イ(真我里=集落名)とフ[ク]イ(福井)は、マガ[イグチ(-口)、フク[イ]ケン(-県)となることから、これらは1音節を形成する二重母音ではないものと判断される⁴。

ここで注目されるのは、第2モーラの長音や撥音だけが低い例が(7)のように豊富にあることであるが、これらも複合語の前部要素に立つと、やはり上昇は第3モーラに移動する。

(7) コ[一]チョー(校長)、ナ[一]ファ(那覇)、グ[ン]マ(群馬)、キョ[一]ト(京都)、ヒョ[一]ゴ(兵庫)、コ[一]チ(高知)、ウィ[一]ジ(上江洲)、ヒャ[一]ジョー(比屋定)等 → コー[チョーセン]セイ、ナー[ファメイ]ブツ、グン[マク]トゥバ等々

ここまでの概略をまとめると、次のようになる。

具志川方言には、高く始まる型(高起式)と低く始まる型(低起式)の区別があり、その前部要素の式の別は複合語においても保存される(式保存)。低起式の中で、第2モーラのみが高い型と、第3モーラ(以降)が高くなる型の対立は、複合語前部要素においては中和する。その場合の上昇は第3モーラにおいて起こるが、その第2・第3モーラが1音節をなす場合に限り、上昇は第2モーラで起こる。一方の高起式は、[○○]○(…)の式音調を持つ。

もう少し立ち入った解釈を加えると、こうなる。これまで低起式としてきたのは、より詳しくは、低く始まって上昇する「低起上昇式」であり、その上昇位置は、第2モーラに下げ核/]/のある場合と、第2・第3モーラが1音節をなす場合に限って第2モーラにあり、それ以外では第3モーラにある。その語例数から見ても、また交替による合流結果から見ても、第3モーラから上昇する型が一般的(無標)と位置付けられる。すなわち、後部要素が付いて低起上昇式複合語のアクセント核が第2モーラよりも後ろにずれると、有標の第2モーラで上昇する必要がなくなり、第3モーラで上昇するものと解される。

先に(7)で特殊モーラのみが高くなる語例が多いとしたのも、第2モーラの核を保持しながら低起上昇式の式特徴を被せると、自動的にその発音しか許されないからである。こ

4 これらは確認済みで間違いないと考えるが、問題となるのは、稀用語ゆえに紙幅の関係で省略した「喜界」である。キ[カ]イに対して、キ[カイ]ジマとキ[カイ]ジマ、一度はキカ[イ]ジマを記録し、同時にキ[カイ]ジマメイ]ブツとキカ[イ]ジマグチも書き取ってある点で、この点はなお確認を要する。

れに対して、後に3.5節で対象とするシ[マ（島）に対するシ[マン]チュ（沖縄の人）などでは、-ン]チュから考えられる^xシマ[ン]チュにはならない。これは、核は第3モーラにあり、マンの1音節全体を高くすることを優先してもなお第2モーラからの上昇が許される環境にあるからである。別の調査で得られた第3モーラが長音のヒ[バー]シ（火箸，cf. ヒ[一火]）も同様に説明できる。

この「式保存規則」には、しかし、若干の例外がある。「鹿児島銀行」の併用例はすでに触れたが、同じ「-銀行」の例で言えば、高起式の「東北-、北陸-、九州-、中央-」の各例が低起式で出ている。後部4モーラ語以外でも「福岡言葉、埼玉県」なども同様で、前部要素が高起式であるにもかかわらず複合語は低起式で出る例であり、ここから、高起式よりも低起式の方が無標形であることが分かる。そのために、馴染みのない複合語は低起式に（も）発音する傾向があるものと考えられる。改めてこれらを逐一確認すれば、複合語に高起式も出てくることも予想される。他に考えられることとして、前部要素単独形自体にも揺れがある可能性もある。さらには、東京近郊の「埼玉、千葉」はよく使うと言うから、「埼玉」と「埼玉県」は、それぞれを[サイ]タマ、サイ[タマ]ケンとして個別に覚えているという可能性も考えられる。

本節の最後に、後部要素が「先生」であっても、前部要素が2モーラの人名の場合には、ここまでとは異なる例外(8)があることを述べておく必要がある。

(8) [ヒガ（比嘉），[ヨギ（与儀）→[ヒガ]センセイ，[ヨギ]センセイ

イ[ハ（伊波），ギ[マ（儀間）→イ[ハ]センセイ，ギ[マ]センセイ

すなわち，^x[ヒガ]セン]セイ，^xイハ[セン]セイとはなっていない。前部要素の型を生かしてそれにそのまま「先生」が核を失った形で続いており、これまでの前部と後部がそれぞれ作用していたのと異なり，(8)では後部要素の力が働かない前部要素型になっているのである。

3.3 後部3モーラ語の場合

3モーラ後部要素においては、「旅行（[○○○]）」と「レモン，言葉（ともに○[○]○）」は-○]○となるのに対して，単独形ではその後者と同じ○[○]○でありながら「文化，みやげ，料理」は-○○]○となって，振る舞いが異なる。これに関しては，両者を分ける語音条件は不明で，今のところ，語彙的に決まっているとするしかない。後部要素の語例を増やした調査が必要である。いずれにしても，後部要素の下げ核の位置（注2に述べたように「旅行」は語末にあると見ておく）は，複合語においてはその位置のまま保存されるか前の方（語頭寄り）に移動するかであって，後ろ（語末寄り）に動く例は今のところ得られていない。また，-○]○○にせよ-○○]○にせよ，前部要素の実現の仕方は後部4モーラ語の場合と共通している。

3.4 後部2モーラ語の場合

次に、後部2モーラ語は、例が[クチ(口)と「県」(この単独形のアクセントは「都、道、府」とともに未調査)だけであるが、(6)でも見たように、まず、-グチは表面的には下降を持たず⁵、低起式前部要素が持つ下げ核も消してしまうのが特徴である。[トー]キョーグチ(東京口)、ウー[シマグチ(大島口)、ユ[ルングチ(与論口)など、前部要素の振る舞いは他と同じである。その結果、下降(↓)は高起式の式特徴として第2モーラの直後に出るだけである。[ドー]グチ(堂口)でも、式音調の下降にそのまま従っているに過ぎない。-グチは式保存をしたまま語末核型を作り出す性質を持つことになる。

興味深いのは、1音節2モーラ語の地名にも(6)の[ドー(堂)、[オー(奥武)、ト[一(唐)の対立があることで、そこに示した「-口」の他に、「-言葉」でも(9)のように規則的に現われる。[オー(奥武)の下降は、常にその位置のまま保たれる。

(9) [ドー]ク]トゥバ、[オー]ク]トゥバ、ト[一]ク]トゥバ

なお、久米島の「集落名+言葉」の例は別表から省いたが、全般的に「-言葉」に比して「-口」の方が馴染みがあり、新しい開墾地は「-言葉」の方が自然である。と同時に「-口」は、その土地と密着している分だけ、時にやや下に見る表現となる傾向があるともいう。

それに対して「-県」は、低起式前部要素には、コ[一]チ(高知)→コー[チ]ケンなど、これまでと同じ原則で上昇した後に-]ケンと続く。ただし、高起式に続く場合は特徴があり、

(10) [カゴ]シマケン

であって、これまで見た4モーラ語・3モーラ語から予想されるような^x[カゴ]シマ]ケンではない点が注意される。高起式前部要素には、式特徴の下降以外には核による下降のない-ケンの形で続くのである。この違いが2モーラという短さ(あるいはさらに、特殊モーラ終わりであること)によるものかは速断できず、もっと多くの後部要素で調べる必要がある。

3.5 後部が「～の人」の場合

最後に、後部2モーラの特徴ケースと言ってもよい「～の人」を取り扱う。その作り方は、大きく2つのパターンに分かれる(以下のCは子音一般)。

まず、「オランダ/アメリカの人」は、ウ[ランダ、ア[メ]リカに-a:を付け、それに伴って下降位置を-]Ca:とし、「アメリカ」ではここでも上昇位置を第3モーラにずらして

(11) ウ[ラン]ダー、アメ[リ]カー

とするもので、さらにこれらの複数形は、-]ターを付けて(12)となる。

5 -グチ複合語の助詞付き形は未調査であるが、調査中の談話に出てきたジャー[ムグチ]デ(比嘉方言で)を記録してあることと、助詞がそのままの高さで続く無核型の例はこれまでの調査で見つかっていないことから、語末核の-グチ]であると考える。ただし、高起式でも[トー]キョーグチ]ガ、[ドー]グチ]ガとなるかどうかも含め、なお確認が必要である。

(12) ウ[ランダー]ター, アメ[リカー]ター

話者によれば、「朝鮮の人」もチョー[シ]ナー, チョー[シナー]ターであると言う(単独形は聞き漏らした)。また、これも別表には示していないが、高起式の「先生」の複数形は

(13) [シン]シー, [シン]シーター (先生方)

で、「-県」と同様、ここでも -]ターの下降は現われない。

今一つのタイプは、文字通り「~の人」を意味する「ンチュ」(「人」の単独形は、むしろツに近い発音)を付けるものである。

(14) [ナー]ク (宮古) → [ナー]クンチュ, イ[ト]マン (糸満) → イト[マン]チュ, カニ[グシ]ク (兼城) → カニ[グシクン]チュ, ナカ[ル]マイ (仲泊) → ナカ[ルマイン]チュなどから、規則的に -]チュという型になると考えられる⁶。

高起式前部要素の[ナグ (名護), [ナゼ (名瀬), [シナ (支那=中国) の場合, [ナグン]チュのように[○○ン]チュとなるのは、第2モーラとトなが1音節をなすためと見る。なお、「与論」など、ンで終わる単語にはンが重ねて続くことはない。上述のイト[マン]チュも同様に、他に[チン (金武), チ[キン] (津堅) の[チン]チュ, チ[キン]チュもそうである。

語末が長音節に終わる単語にンチュが続くと、(15)のドーンのような超重音節が生ずる。

(15) ジャナ[ドーン]チュ (謝名堂の人。の人, 以下略), ヒヤー[ジョーン]チュ (比屋定);

ナー[カノーン]チュ (仲村渠) Cf. グッ[チャン]チュ (具志川), ウチ[ナン]チュ (沖縄)

この有標な音節構造は避けて重音節にする傾向があり、グッ[チャ]ー (具志川) に対するグッ[チャン]チュは、*グッ[チャーン]チュを嫌った形である。この回避には、その直前がグッという重音節であることがリズム面で関与している可能性がある。関連して、ヒヤー[ジョン]チュも一度記録してある。一方、ウ[チ]ナー (沖縄) に対するウチ[ナン]チュも回避形ではあるが、これはすでに他方言に由来する沖縄共通語となっていることが関わっているであろう。そして、ここでも1音節2モーラ語の「~の人」には、

(16) [ドーン]チュ (堂), [オ]ーンチュ (奥武), ト[ーン]チュ〜ト[一]ンチュ (唐)

の対立があるが(「唐」はト[一]ヌチュも),「堂」は短く[ドン]チュとも言うという。これは、平調の超重音節の方が、曲調を含む重音節よりも短く発音しやすいからと考える。

〔引用文献〕

上野善道 (2019a) 「久米島方言のアクセント資料 (2)」『南島文化』41: 83-92.

上野善道 (2019b) 「久米島方言の体言のアクセント資料」『琉球の方言』43: 131-172.

6 不思議なのは、[ナゼン]チュ (名瀬の人), アマ[ミン]チュ (奄美の人) までは規則的であったのに、奄美群島の「与論, 沖永良部島, 徳之島, 大島, 喜界島」に至って突然変わり、ユ[ルン]チュ, ウキ[エラブン]チュ等で、どれもンチュ中に下降が現われなかった点である。「与論」だけは確認をしたところユ[ルン]チュも出てきたが、奄美の島々はあまり口にしないのでどうも、ということだったので、それ以上詰めることはしなかった。助詞付き形も聞いていない。稀用が絡んでいることは確かでも、それ以上にこの形が何か意味のあることなのかは不明である。

上野善道（2020a）「久米島方言のアクセント資料（3）」『南島文化』42: 193-208.

上野善道（2020b）「久米島方言の体言のアクセント資料——那覇語彙（1）——」『琉球の方言』44: 189-241.

上野善道（2020c）「久米島方言のアクセント資料（4）」『南島文化』43: 105-121.

上野善道（2022印刷中）「久米島方言の体言のアクセント資料——那覇語彙（2）——」『琉球の方言』45.

[付記] ご多用中にもかかわらず時間を工面してご教示下さっている話者の宮里洋一氏に厚く感謝を申し上げます。本報告は、2021年度JSPS科学研究費19H00530の研究成果である。同時に、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪菌晴夫），並びに「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（同：木部暢子）の研究成果の一部でもある。

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
オランダ研究	オ[ランダケン]キュー	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	[ケン]キュー (研究)
アメリカ研究	アメ[リカケン]キュー	アメリカ	ア[メ]リカ	研究
鹿児島研究	[カゴ]シマケン]キュー	鹿児島	[カグ]シマ	研究
広島研究	ヒロ[シマケン]キュー	広島	ヒロ[シマ	研究
オランダ製品	オ[ランダセイ]ヒン	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	[セイ]ヒン (製品)
アメリカ製品	アメ[リカセイ]ヒン	アメリカ	ア[メ]リカ	製品
鹿児島製品	[カゴ]シマセイ]ヒン	鹿児島	[カグ]シマ	製品
広島製品	ヒロ[シマセイ]ヒン	広島	ヒロ[シマ	製品
オランダ名物	オ[ランダメイ]ブツ	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	[メイ]ブツ (名物)
アメリカ名物	アメ[リカメイ]ブツ	アメリカ	ア[メ]リカ	名物
鹿児島名物	[カグ]シマメイ]ブツ	鹿児島	[カグ]シマ	名物
広島名物	ヒロ[シマメイ]ブツ	広島	ヒロ[シマ	名物
久米島名物	クメ[ジマメイ]ブツ	久米島	クミ[ジマ, クメ[ジマ	名物
沖縄名物	ウチ[ナーメイ]ブツ	沖縄	ウ[チ]ナー	名物
那覇名物	ナー[ファメイ]ブツ	那覇	ナ[ー]ファ	名物
宮古名物	[ナー]クメ]イブツ	宮古	[ナー]ク, [ミヤ]ク	名物
石垣名物	[イシ]ガキメイ]ブツ	石垣	[イシ]ガキ, [イシ]ガチ	名物
八重山名物	[エー]マメイ]ブツ	八重山	[イエー]マ	名物
与那国名物	[ユナ]グニメイ]ブツ	与那国	[ユナ]グニ, [ヨナ]グニ	名物
与論名物	ヨ[ロンメイ]ブツ	与論	ユ[ル]ン, ヨ[ロ]ン	名物
沖永良部名物	オキ[エラブメイ]ブツ	沖永良部	ウキ[エ]ラブ, オキ[エ]ラブ	名物
徳之島名物	トゥク[ヌシマメイ]ブツ	徳之島	トゥク[ヌ]シマ	名物
大島名物	オー[シマメイ]ブツ	大島	ウー[シマ, ウフ[シマ	名物
名瀬名物	[ナゼ]メイ]ブツ	名瀬	[ナセ, [ナゼ	名物
東京名物	[トー]キョーメイ]ブツ	東京	[トー]キョー, ヤマ[トウ, <o>[トゥー]キューか	名物
男先生	イキ[ガセン]セイ	男	イキ[ガ	[セン]セイ (先生), <o>[シン]シー, [シー]シーとも
女先生	イナ[グセン]セイ	女	イナ[グ	先生
教頭先生	[キョー]トーセン]セイ	教頭	[キョー]トー	先生
校長先生	コー[チョーセン]セイ	校長	コ[ー]チョー	先生
年寄り先生	トゥシ[ユイセン]セイ	年寄り	トゥシ[ユイ	先生
若先生	ワ[カーセン]セイ	若	ワ[カ]ー, ワカ[ムン	先生
島袋先生	シマ[ブクロセン]セイ	島袋	シマ[ブ]クロ	先生
新垣先生	[アラ]カキセン]セイ	新垣	[アラ]カチ, [アラ]カキ	先生
糸数先生	イト[カズセン]セイ	糸数	イト[カズ, イト[カジ	先生
稲嶺先生	イナ[ミネセン]セイ	稲嶺	イナ[ミネ	先生
上原先生	[ウエ]ハラセン]セイ	上原	[ウエ]ハラ Cf. 地名は[ウィー]バル	先生
大城先生	[オー]シロセン]セイ	大城	[オー]シロ Cf. 地名は[ウフ]グシク	先生

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
金城先生	[キン]ジョーセン]セイ	金城	[キン]ジョー	先生
具志堅先生	[グシ]ケンセン]セイ	具志堅	[グシ]ケン	先生
国吉先生	[クニ]ヨシセン]セイ	国吉	[クニ]ヨシ	先生
崎村先生	[サキ]ムラセン]セイ	崎村	[サキ]ムラ	先生
佐久川先生	サク[ガーセン]セイ	佐久川	サク[ガー	先生
新里先生	シン[ザトセン]セイ	新里	シン[ザト	先生
新城先生	[シン]ジョーセン]セイ	新城	[シン]ジョー, アラ[グシ]ク	先生
高江洲先生	タカ[エスセン]セイ	高江洲	タカ[イエス	先生
高橋先生	タカ[ハシセン]セイ	高橋	タ[カ]ハシ (那覇にある橋 はトゥマ[イタカ]ハシ)	先生
玉城先生	[タマ]シロセン]セイ	玉城	[タマ]シロ, タマ[グシ]ク	先生
仲宗根先生	ナカ[ソネセン]セイ	仲宗根	ナカ[ソネ	先生
仲原先生	ナカ[ハラセン]セイ	仲原	ナカ[ハラ	先生
中村先生	ナカ[ムラセン]セイ	中村	ナカ[ムラ	先生
前里先生	マエ[サトセン]セイ	前里	マエ[サト, <o>メー[ザトゥ	先生
真栄平先生	マエ[ヒラセン]セイ	真栄平	マエ[ヒラ	先生
又吉先生	[マタ]ヨシセン]セイ	又吉	[マタ]ヨシ	先生
宮里先生	ミヤ[ザトセン]セイ	宮里	ミヤ[ザト (OK)	先生
宮平先生	[ミヤ]ヒラセン]セイ	宮平	[ミヤ]ヒラ (OK)	先生
本永先生	モト[ナガセン]セイ	本永	モト[ナガ	先生
盛吉先生	[モリ]ヨシセン]セイ	盛吉	[モリ]ヨシ	先生
安村先生	ヤス[ムラセン]セイ	安村	ヤス[ムラ	先生
山川先生	ヤマ[ガーセン]セイ	山川	ヤマ[ガー, ヤマ[ガワ	先生
山里先生	ヤマ[ザトセン]セイ	山里	ヤマ[ザトゥ, ヤマ[ザト	先生
山城先生	ヤマ[シロセン]セイ	山城	ヤマ[シロ Cf. ヤマ[グシ]ク	先生
吉永先生	ヨシ[ナガセン]セイ	吉永	ヨシ[ナガ	先生
吉原先生	ヨシ[ハラセン]セイ	吉原	ヨシ[ハラ, ヨシ[ワラ	先生
与那嶺先生	ヨナ[ミネセン]セイ	与那嶺	ヨナ[ミネ, <o>ユナ[ミニ Cf. 屋号にユナン[ミあり	先生
渡辺先生	ワタ[ナベセン]セイ	渡辺	ワタ[ナベ	先生
池間先生	イケ[マセン]セイ	池間	イケ[マ	先生
内間先生	[ウチ]マセン]セイ	内間	[ウチ]マ	先生
大田先生	オー[タセン]セイ	大田	オー[タ Cf. 地名はウ[フ]タ	先生
我那覇先生	ガナ[ハセン]セイ	我那覇	ガ[ナ]ハ	先生
木村先生	キム[ラセン]セイ	木村	キム[ラ	先生
柴田先生	[シバ]タセン]セイ	柴田	<m>[シバ]タ	先生
下地先生	[シモ]ジセン]セイ	下地	[シモ]ジ	先生
鈴木先生	スズ[キセン]セイ	鈴木	スズ[キ	先生
平良先生	[タイ]ラセン]セイ	平良	[タイ]ラ	先生
高良先生	[タカ]ラセン]セイ	高良	[タカ]ラ	先生

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
田里先生	タサ[トゥセン]セイ	田里	タサ[トゥ, タサ[ト	先生
田中先生	タナ[カセン]セイ	田中	タナ[カ	先生
多和田先生	タワ[タセン]セイ	多和田	タワ[タ	先生
津波古先生	ツハ[コセン]セイ	津波古	ツハ[コ	先生
照屋先生	テル[ヤセン]セイ	照屋	テル[ヤ	先生
平田先生	[ヒラ]タセン]セイ	平田	[ヒラ]タ	先生
宮城先生	ミヤ[ギセン]セイ	宮城	ミヤ[ギ Cf. 県名 ミ[ヤ]ギ	先生
山田先生	ヤマ[ダセン]セイ	山田	ヤマ[ダ	先生
吉田先生	ヨシ[ダセン]セイ	吉田	ヨシ[ダ	先生
伊波先生	イ[ハ]センセイ	伊波	イ[ハ	先生
儀間先生	ギ[マ]センセイ	儀間	ギ[マ Cf. 地名等はジ- [マ	先生
比嘉先生	[ヒガ]センセイ	比嘉	[ヒガ Cf. 地名等は[ヒージャ	先生
与儀先生	[ヨギ]センセイ	与儀	[ヨギ	先生
鹿児島銀行	[カゴ]シマギン]コー, カゴ[シマギン]コー	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	ギン[コー(銀行)
広島銀行	ヒロ[シマギン]コー	広島	ヒロ[シマ	銀行
東京銀行	[ト-]キョーギン]コー	東京	[ト-]キョー	銀行
大阪銀行	[オ-]サカギン]コー	大阪	[オ-]サカ, <o>[ウ-]サカ	銀行
九州銀行	キュー[シューギン]コー (OK)	九州	[キュー]シュー	銀行
名古屋銀行	[ナグ]ヤギン]コー	名古屋	[ナグ]ヤ(身近), [ナゴ]ヤ	銀行
北海道銀行	ホッ[カイドーギン]コー	北海道	ホッ[カイ]ドー	銀行
東北銀行	<m>ト- [ホクギン]コー (OK)	東北	[ト-]ホク	銀行
北陸銀行	<m>ホク[リクギン]コー	北陸	[ホク]リク	銀行
中央銀行	チュ- [オーギン]コー (OK)	中央	[チュ-]オー	銀行
三重銀行	[ミエ]ギン]コー	三重	[ミエ	銀行
信用組合	[シン]ヨークミ]アイ	信用	[シン]ヨー	クミ[アイ(組合)
農業組合	[ノー]ギョークミ]アイ	農業	[ノー]ギョー	組合
漁業組合	ギョ[ギョークミ]アイ	漁業	[ギョギョー]ー [?]	組合
林業組合	[リン]ギョークミ]アイ	林業	[リン]ギョー	組合
職員組合	ショク[インクミ]アイ	職員	[ショク]イン	組合
教職員組合	キョー[ショクインクミ]アイ	教職員	キョー[ショク]イン	組合
協同組合	キョー[ドークミ]アイ	協同	[キョー]ドー	組合
生活協同組合	セイ[カツキョードークミ]アイ	生活	セイ[カツ	組合
奄美新聞	アマ[ミシン]ブン	奄美	ア[マ]ミ	シン[ブン(新聞)
大島新聞	オー[シマシン]ブン	大島	ウ- [シマ, オー[シマ	新聞
奄美大島新聞	アマ[ミオーシマシン]ブン	奄美大島	アマ[ミオー]シマ (OK)	新聞
東京新聞	ト- [キョーシン]ブン	東京	[ト-]キョー	新聞
京都新聞	キョー[トシン]ブン	京都	キョ[ー]ト	新聞
九州新聞	キュー[シューシン]ブン	九州	[キュー]シュー	新聞
名古屋新聞	[ナゴ]ヤシン]ブン	名古屋	[ナグ]ヤ, [ナゴ]ヤ	新聞
産経新聞	サン[ケイシン]ブン	産経	[サン]ケイ	新聞
読売新聞	ヨミ[ウリシン]ブン	読売	ヨミ[ウリ	新聞

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
毎日新聞	マイ[ニチシン]ブン	毎日	マイ[ニチ Cf. 日々の意 はメ[ー]ニチ	新聞
朝日新聞	アサ[ヒシン]ブン	朝日	ア[サ]ヒ	新聞
四国新聞	シコ[クシン]ブン	四国	シ[コ]ク	新聞
三重新聞	[ミエ]シン]ブン (時に-シンプ]ンとも)	三重	[ミエ	新聞
滋賀新聞	[シガ]シン]ブン	滋賀	[シガ	新聞
東日本新聞	ヒガ[シニッポンシン]ブン	東日本	ヒガ[シニッ]ポン	新聞
古新聞	フル[シン]ブン	古	フ[ル]ー	新聞
琉球新報	リュウ[キューシン]ポー	琉球	リュウ[キュー	シン[ポー (新報)
沖縄タイムス	オキ[ナワタイ]ムス	沖縄	ウ[チ]ナー	タイ[ムス
オランダ民謡	オ[ランダミン]ヨー	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	ミン[ヨー (民謡)
アメリカ民謡	アメ[リカミン]ヨー	アメリカ	ア[メ]リカ	民謡
鹿児島民謡	[カゴ]シマミン]ヨー	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	民謡
広島民謡	ヒロ[シマミン]ヨー	広島	ヒロ[シマ	民謡
オランダ旅行	オ[ランダリョ]コー	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	[リョ]コー (旅行)
アメリカ旅行	アメ[リカリョ]コー	アメリカ	ア[メ]リカ	旅行
鹿児島旅行	[カゴ]シマリョ]コー	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	旅行
広島旅行	ヒロ[シマリョ]コー	広島	ヒロ[シマ	旅行
オランダ文化	オ[ランダブン]カ	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	ブ[ン]カ (文化)
アメリカ文化	アメ[リカブン]カ	アメリカ	ア[メ]リカ	文化
鹿児島文化	[カゴ]シマブン]カ	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	文化
広島文化	ヒロ[シマブン]カ	広島	ヒロ[シマ	文化
オランダ土産	ウ[ランダミヤ]ギ	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	ミ[ヤ]ギ (土産), ミヤ[ギムン (-物)
アメリカ土産	アメ[リカミヤ]ギ	アメリカ	ア[メ]リカ	土産
鹿児島土産	[カグ]シマミヤ]ギ	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	土産
広島土産	ヒロ[シマミヤ]ギ	広島	ヒロ[シマ	土産
オランダ料理	オ[ランダリョー]リ	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	リョ[ー]リ (料理)
アメリカ料理	アメ[リカリョー]リ	アメリカ	ア[メ]リカ	料理
鹿児島料理	[カゴ]シマリョー]リ	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	料理
広島料理	ヒロ[シマリョー]リ	広島	ヒロ[シマ	料理
オランダレモン	オ[ランダレ]モン	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	レ[モ]ン
アメリカレモン	アメ[リカレ]モン	アメリカ	ア[メ]リカ	レモン
鹿児島レモン	[カゴ]シマレ]モン	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	レモン
広島レモン	ヒロ[シマレ]モン	広島	ヒロ[シマ	レモン
オランダ言葉	ウ[ランダク]トゥバ	オランダ	ウ[ランダ, オ[ランダ	ク[トゥ]バ (言葉)
アメリカ言葉	アメ[リカク]トゥバ	アメリカ	ア[メ]リカ	言葉
北海道言葉	ホッ[カイドーク]トゥバ	北海道	ホッ[カイ]ドー	言葉
青森言葉	アオ[モリク]トゥバ	青森	ア[オ]モリ	言葉
秋田言葉	アキ[タク]トゥバ	秋田	ア[キ]タ	言葉

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
岩手言葉	イワ[テク]トゥバ	岩手	イ[ワ]テ	言葉
山形言葉	ヤマ[ガタク]トゥバ	山形	ヤ[マ]ガタ	言葉
宮城言葉	ミヤ[ギク]トゥバ	宮城	ミ[ヤ]ギ Cf. 人名 ミヤ[ギ]	言葉
福島言葉	フク[シマク]トゥバ	福島	フ[ク]シマ	言葉
茨城言葉	イバ[ラギク]トゥバ	茨城	イ[バ]ラギ [g]	言葉
栃木言葉	トチ[ギク]トゥバ	栃木	トチ[ギ]	言葉
群馬言葉	グン[マク]トゥバ	群馬	グ[ン]マ	言葉
埼玉言葉	[サイ]タマク]トゥバ	埼玉	[サイ]タマ (OK)	言葉
東京言葉	[トー]キョーク]トゥバ	東京	[トー]キョー	言葉
千葉言葉	[チバ]ク]トゥバ	千葉	[チバ]	言葉
神奈川言葉	カナ[ガワク]トゥバ	神奈川	カナ[ガワ]	言葉
新潟言葉	[ニー]ガタク]トゥバ	新潟	[ニー]ガタ	言葉
長野言葉	ナガ[ノク]トゥバ	長野	ナ[ガ]ノ	言葉
山梨言葉	ヤマ[ナシク]トゥバ	山梨	ヤマ[ナシ]	言葉
静岡言葉	シズ[オカク]トゥバ	静岡	シ[ズ]オカ	言葉
富山言葉	トヤ[マク]トゥバ	富山	ト[ヤ]マ	言葉
岐阜言葉	[ギフ]ク]トゥバ	岐阜	[ギフ]	言葉
愛知言葉	アイ[チク]トゥバ	愛知	<m>アイ[チ]	言葉
石川言葉	[イシ]カワク]トゥバ	石川	[イシ]カワ	言葉
福井言葉	フク[イク]トゥバ	福井	フ[ク]イ	言葉
滋賀言葉	[シガ]ク]トゥバ	滋賀	[シガ]	言葉
三重言葉	[ミエ]ク]トゥバ	三重	[ミエ]	言葉
奈良言葉	[ナラ]ク]トゥバ	奈良	<m>[ナラ(時に[ナ]ラにも)]	言葉
京都言葉	キョー[トク]トゥバ	京都	キョ[ー]ト	言葉
大阪言葉	[オー]サカク]トゥバ	大阪	[オー]サカ	言葉
和歌山言葉	[ワカ]ヤマク]トゥバ	和歌山	[ワカ]ヤマ	言葉
兵庫言葉	ヒョー[ゴク]トゥバ	兵庫	ヒョ[ー]ゴ	言葉
鳥取言葉	トッ[トリク]トゥバ	鳥取	トッ[トリ]	言葉
岡山言葉	オカ[ヤマク]トゥバ	岡山	オ[カ]ヤマ?, [オカ]ヤマ?	言葉
島根言葉	シマ[ネク]トゥバ	島根	シ[マ]ネ	言葉
広島言葉	ヒロ[シマク]トゥバ	広島	ヒロ[シマ]	言葉
山口言葉	ヤマ[グチク]トゥバ	山口	ヤ[マ]グチ	言葉
香川言葉	カガ[ワク]トゥバ	香川	カ[ガ]ワ	言葉
徳島言葉	トク[シマク]トゥバ	徳島	トク[シマ]	言葉
愛媛言葉	エヒ[メク]トゥバ	愛媛	<m>エ[ヒ]メ Cf. マツヤ[マ]	言葉
高知言葉	コー[チク]トゥバ	高知	コ[ー]チ	言葉
福岡言葉	フク[オカク]トゥバ	福岡	[フク]オカ	言葉
大分言葉	オー[イタク]トゥバ	大分	オー[イタ (, [オー]イタも?)	言葉
宮崎言葉	[ミヤ]ザキク]トゥバ	宮崎	[ミヤ]ザキ, ミ[ヤ]ザキ	言葉
熊本言葉	クマ[モトク]トゥバ	熊本	クマ[モト]	言葉
鹿児島言葉	[カゴ]シマク]トゥバ	鹿児島	[カゴ]シマ, [カゴ]シマ	言葉
佐賀言葉	[サガ]ク]トゥバ	佐賀	<m>[サガ(ガは低め)]	言葉

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
長崎言葉	[ナガ]サキク]トウバ	長崎	[ナガ]サキ	言葉
沖縄言葉	ウチ[ナーク]トウバ	沖縄	オ[キ]ナワ, ウ[チ]ナー	言葉
男言葉	イキ[ガク]トウバ	男	イキ[ガ]	言葉
女言葉	イナ[グク]トウバ	女	イナ[グ]	言葉
島言葉	<m>シマ[ク]トウバ	島	シ[マ]	言葉
大和言葉(本土の)	ヤマ[トゥク]トウバ	大和	ヤマ[トゥ]	言葉
久米島言葉	クメ[ジマク]トウバ	久米島	クミ[ジマ, クメ[ジマ]	言葉
琉球言葉	リユウ[キユーク]トウバ	琉球	リユウ[キユウ]	言葉
那覇言葉	ナー[ファク]トウバ	那覇	ナ[ー]ファ	言葉
宮古言葉	[ナー]クク]トウバ	宮古	[ナー]ク, [ミヤ]ク	言葉
石垣言葉	[イシ]ガキク]トウバ	石垣	[イシ]ガキ, [イシ]ガチ	言葉
八重山言葉	[エー]マク]トウバ	八重山	[イエー]マ	言葉
与那国言葉	[ヨナ]グニク]トウバ	与那国	[ユナ]グニ, [ヨナ]グニ	言葉
与論言葉	ヨ[ロンク]トウバ	与論	ユ[ル]ン, ヨ[ロ]ン	言葉
沖永良部言葉	オキ[エラブク]トウバ	沖永良部	ウキ[エ]ラブ, オキ[エ]ラブ	言葉
徳之島言葉	トク[ノシマク]トウバ	徳之島	トゥク[ヌ]シマ	言葉
大島言葉	オー[シマク]トウバ	大島	ウー[シマ, ウフ[シマ]	言葉
名瀬言葉	[ナゼ]ク]トウバ	名瀬	[ナセ, [ナゼ]	言葉
東京言葉	[トー]キョーク]トウバ	東京	[トー]キョウ	言葉
京言葉	<m>[キョウ]ク]トウバ	京	<m>[キョウ]?	言葉
北海道	ホッ[カイ]ドー	北海道	ホッ[カイ]ドー	ドー
青森県	アオ[モリ]ケン	青森	ア[オ]モリ	ケン
秋田県	アキ[タ]ケン	秋田	ア[キ]タ	県
岩手県	イワ[テ]ケン	岩手	イ[ワ]テ	県
山形県	ヤマ[ガタ]ケン	山形	ヤ[マ]ガタ	県
宮城県	ミヤ[ギ]ケン	宮城	ミ[ヤ]ギ	県
福島県	フク[シマ]ケン	福島	フ[ク]シマ	県
茨城県	イバ[ラギ]ケン	茨城	イ[バ]ラギ [g]	県
栃木県	トチ[ギ]ケン	栃木	<m>トチ[ギ]	県
群馬県	グン[マ]ケン	群馬	グ[ン]マ	県
埼玉県	サイ[タマ]ケン (OK)	埼玉	[サイ]タマ (OK)	県
東京都	[トー]キョート	東京	[トー]キョウ	ト
千葉県	[チバ]ケン	千葉	[チバ]	県
神奈川県	カナ[ガワ]ケン	神奈川	カナ[ガワ]	県
新潟県	[ニー]ガタケン	新潟	[ニー]ガタ	県
長野県	ナガ[ノ]ケン	長野	ナ[ガ]ノ	県
山梨県	ヤマ[ナシ]ケン	山梨	ヤマ[ナシ]	県
静岡県	シズ[オカ]ケン	静岡	シ[ズ]オカ	県
富山県	トヤ[マ]ケン	富山	ト[ヤ]マ	県
岐阜県	[ギフ]ケン	岐阜	[ギフ]	県

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
愛知県	アイ[チ]ケン	愛知	<m>アイ[チ	県
石川県	[イシ]カワケン	石川	[イシ]カワ	県
福井県	フク[イ]ケン (OK)	福井	フ[ク]イ	県
滋賀県	[シガ]ケン	滋賀	[シガ	県
三重県	[ミエ]ケン	三重	[ミエ	県
奈良県	[ナラ]ケン	奈良	<m>[ナラ(時に[ナ]ラにも)	県
京都府	<m>キョー[ト]フ	京都	キョ[ー]ト	フ
大阪府	[オー]サカフ	大阪	[オー]サカ	府
和歌山県	[ワカ]ヤマケン	和歌山	[ワカ]ヤマ	県
兵庫県	ヒョー[ゴ]ケン	兵庫	ヒョ[ー]ゴ	県
鳥取県	トッ[トリ]ケン	鳥取	トッ[トリ	県
岡山県	オカ[ヤマ]ケン?, [オカ]ヤマケン?	岡山	オ[カ]ヤマ?, [オカ]ヤマ?	県
島根県	シマ[ネ]ケン	島根	シ[マ]ネ	県
広島県	ヒロ[シマ]ケン	広島	ヒロ[シマ	県
山口県	ヤマ[グチ]ケン	山口	ヤ[マ]グチ	県
香川県	カガ[ワ]ケン	香川	カ[ガ]ワ	県
徳島県	トク[シマ]ケン	徳島	トク[シマ	県
愛媛県	エヒ[メ]ケン	愛媛	<m>エ[ヒ]メ	県
高知県	コー[チ]ケン	高知	コ[ー]チ	県
福岡県	[フク]オカケン	福岡	[フク]オカ	県
大分県	オー[イタ]ケン	大分	オー[イタ(, [オー]イタも?) ベッ[プはよく言うが.	県
宮崎県	ミヤ[ザキ]ケン	宮崎	[ミヤ]ザキ, ミ[ヤ]ザキ	県
熊本県	クマ[モト]ケン	熊本	クマ[モト	県
鹿児島県	[カゴ]シマケン	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	県
佐賀県	[サガ]ケン	佐賀	<m>[サガ	県
長崎県	[ナガ]サキケン	長崎	[ナガ]サキ	県
沖縄県	オキ[ナワ]ケンのみ	沖縄	オ[キ]ナワ, ウ[チ]ナー	県
島口	<普>シマ[グチ	島	シ[マ	[クチ(口)
大和口(本土の)	ヤマ[トゥグチ	大和	ヤマ[トゥ	口
久米島口	クメ[ジマグチ	久米島	クミ[ジマ, クメ[ジマ	口
琉球口	リユー[キューグチ	琉球	リユー[キュー, リユー[チュー	口
那覇口	ナー[ファグチ	那覇	ナ[ー]ファ	口
宮古口	[ナー]クグチ	宮古	[ナー]ク, [ミヤ]ク	口
石垣口	[イシ]ガチグチ	石垣	[イシ]ガチ, [イシ]ガキ	口
八重山口	[イエー]マグチ	八重山	[イエー]マ	口
与那国口	[ユナ]グニグチ	与那国	[ユナ]グニ, [ヨナ]グニ	口
与論口	ユ[ルングチ	与論	ユ[ル]ン, ヨ[ロ]ン	口

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
沖永良部口	ウキ[エラブグチ	沖永良部	ウキ[エ]ラブ, オキ[エ]ラブ	口
徳之島口	トゥク[ヌシマグチ	徳之島	トゥク[ヌ]シマ	口
大島口	ウー[シマグチ	大島	ウー[シマ, ウフ[シマ	口
名瀬口	[ナゼ]グチ	名瀬	[ナセ, [ナゼ	口
喜界口	<m>キカ[イジマグチ [?]	喜界	キ[カ]イ, <m>キカ[イ]ジマ [?]	口
東京口	[トー]キョーグチ	東京	[トー]キョー	口
京口	<m>[キョー]グチ?	京	<m>[キョー? (大阪は言うが)	口
西銘口	[ニシ]ミグチ	西銘	[ニシ]ミ	口
大田口	ウフ[タグチ	大田	ウ[フ]タ	口
嘉手刈口	カデ[カルグチ	嘉手刈	カ[デ]カル	口
儀間口	ジ(ー)[マグチ, ジ(ー)[マク]トゥバ (OK)	儀間	ジ(ー)[マ, ジ[マ	口
山城口	ヤマ[グシクグチ	山城	ヤマ[グシ]ク	口
阿嘉口	ア(ー)[カグチ	阿嘉	ア(ー)カ	口
宇江城口	[ドー]グチ, [ウィー]グシクグチ	宇江城	[ドー, [ウィー]グシク. 比屋定と併せて ドー[ヒャー]ジョーとも	口
宇根口	[ウチャ]ムグチ	宇根	[ウチャ]ム, ウ[ネ	口
上江洲口	ウィー[ジグチ	上江洲	ウィ(ー)ジ	口
奥武口	[オ(ー)]グチ, [オ(ー)]ク]トゥバ (OK)	奥武	[オ(ー)]	口
大原口, -言葉	ウフ[バルグチ, <普>オ(ー)[ハラク]トゥバ	大原	ウフ[バル, オ(ー)[ハラ	口
兼城口	カニ[グシクグチ	兼城	カニ[グシ]ク	口
具志川口	グッ[チャグチ	具志川	グッ[チャ]ー, [ミー]ジマ (新島)	口
島尻口	シマ[ジリグチ	島尻	シマ[ジリ	口
謝名堂口	シャナ[ドーグチ	謝名堂	<o>ヤ[ナ]ドー, ジャ[ナ]ドー	口
銭田口	ジン[ジャグチ	銭田	ジ[ン]ジャ	口
鳥島口	トゥイ[シマグチ	鳥島	トゥイ[シマ	口
仲地口	ナカ[チグチ	仲地	ナカ[チ	口
仲泊口	ナカ[ルマイグチ	仲泊	ナカ[ル]マイ	口
仲村渠口	ナー[カノーグチ, ナ[カンダカリグチ	仲村渠	ナー[カ]ノー, ナ[カンダ]カリ	口
比嘉口	ジャー[ムグチ, <m>[ヒガ]グチ	比嘉	ジャー[ム, [ヒガ	口
比屋定口	ヒャ(ー)[ジョーグチ	比屋定	ヒャ(ー)ジョー	口
真我里口, -言葉	マガ[イグチ (OK), マガ[イク]トゥバ	真我里	マ[ガ]イ	口

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
真謝口	マー[ジャグチ	真謝	マ[一]ジャ	口
山里口	ヤマ[ザトウグチ, ヤン[ダトウグチ	山里	ヤ[マ]ザトウ, ヤ[マ]ザト ヤン[ダ]トウ Cf. 人名	口
仲里口	ナカ[ザトウグチ	仲里	ナカ[ザトウ, ナカ[ザト	口
北原口, -言葉	<m>[キタ]ハラグチ, <普>[キタ]ハラク]トウバ	北原	[キタ]ハラ	口
開墾口, -言葉	<m>[カイ]クングチ, <普>[カイ]クンク]トウバ	開墾	[カイ]クン (大原と北原)	口
唐口, -言葉	トー[グチ, トー[ク]トウバ	唐(中国)	ト[一	口
オランダの人	ウ[ラン]ダー. ウ[ランダー]ター (複)	オランダ	ウ[ラン]ダ	
アメリカの人	アメ[リ]カー, アミ[リ]カー アメ[リカー]ター (複)	アメリカ	ア[メ]リカ	
朝鮮の人	チョー[シ]ナー. チョー[シナー]ター (複)	朝鮮		
鹿児島の人	[カゴ]シマンチュ	鹿児島	[カグ]シマ, [カゴ]シマ	[ツ] (人)
広島の人	ヒロ[シマン]チュ	広島	ヒロ[シマ	[ツ]
沖縄の人	ウチ[ナン]チュ (OK), <x>リユーキューンチュ	沖縄	ウ[チ]ナー	[ツ]
那覇の人	ナー[ファン]チュ	那覇	ナ[一]ファ	[ツ]
宮古の人	[ナー]クンチュ	宮古	[ナー]ク, [ミヤ]ク	[ツ]
石垣の人	[イシ]ガチンチュ	石垣	[イシ]ガチ, [イシ]ガキ	[ツ]
八重山の人	[イエー]マンチュ	八重山	[イエー]マ	[ツ]
与那国の人	[ユナ]グニンチュ	与那国	[ユナ]グニ, [ヨナ]グニ	[ツ]
伊是名の人	[イジ]ナンチュ	伊是名	[イジ]ナ	[ツ]
伊平屋の人	イヒ[ヤン]チュ	伊平屋	イ[ヒ]ヤ, イ[へ]ヤ	[ツ]
伊江島の人	イー[ジマン]チュ	伊江島	イー[ジマ	[ツ]
渡名喜の人	トゥナ[チン]チュ	渡名喜	トゥナ[チ	[ツ]
渡嘉敷の人	トゥカ[シキン]チュ	渡嘉敷	トゥカ[シキ	[ツ]
津堅の人	チ[キン]チュ	津堅	チ[キン]ン, チ[キン]クダ]カ	[ツ]
糸満の人	イト[マン]チュ	糸満	イ[ト]マン (イ[ク]マンと言う人も)	[ツ]
名護の人	[ナグン]チュ	名護	[ナグ	[ツ]
やんばるの人	ヤン[バルン]チュ	やんばる	ヤン[バル]ル(北部, 国頭)	[ツ]
今帰仁の人	ナチ[ジン]チュ	今帰仁	ナ[チ]ジン	[ツ]
金武・やんばる の人	[チン]チュ, [チン]ヤンバルン(1)チュ,	金武	[チン, [キン. やんばると併 せて[チン]ヤンバルと.	[ツ]
奄美の人	アマ[ミン]チュ	奄美	ア[マ]ミ	[ツ]
与論の人	<m>ユ[ルン]チュ, <m>ユ[ル]ンチュ	与論	ユ[ル]ン, ヨ[ロ]ン	[ツ]
沖永良部の人	<m>ウキ[エラブン]チュ	沖永良部	ウキ[エ]ラブ, オキ[エ]ラブ	[ツ]
徳之島の人	<m>トゥク[ヌシマン]チュ	徳之島	トゥク[ヌ]シマ	[ツ]
大島の人	<m>ウフ[シマン]チュ	大島	ウー[シマ, ウフ[シマ]	[ツ]
名瀬の人	[ナゼン]チュ	名瀬	[ナゼ], [ナセ]	[ツ]
東京の人	[トー]キョーンチュ	東京	[トー]キョー	[ツ]
大和の人(本土)	ヤマ[トウ]ンチュ	大和	ヤマ[トウ	[ツ]
久米島の人	クミ[ジマン]チュ	久米島	クミ[ジマ, クメ[ジマ]	[ツ]
西銘の人	[ニシ]ミンチュ	西銘	[ニシ]ミ	[ツ]

複合語	具志川方言アクセント	前部要素	具志川方言アクセント	後部要素
大田の人	ウフ[タン]チュ	大田	ウ[フ]タ	[ツ]
嘉手刈の人	カデ[カルン]チュ	嘉手刈	カ[デ]カル	[ツ]
儀間の人	ジ[マン]チュのみ (OK)	儀間	ジ[マ, ジー[マ	[ツ]
山城の人	ヤマ[グシクン]チュ	山城	ヤマ[グシ]ク	[ツ]
阿嘉の人	アー[カン]チュ	阿嘉	ア[ー]カ	[ツ]
宇江城の人	[ドーン]チュ, [ドン]チュ [ウィー]グシクンチュ	宇江城	[ドー] [ウィー]グシク	[ツ]
宇根の人	[ウチャ]ムンチュ	宇根	[ウチャ]ム	[ツ]
上江洲の人	ウィー[ジン]チュ	上江洲	ウィ[ー]ジ	[ツ]
奥武の人	[オ]ーンチュ (OK)	奥武	[オ]ー	[ツ]
大原の人	ウフ[バルン]チュ, [カイ]クンチュ	大原	ウフ[バル], [カイ]クン	[ツ]
兼城の人	カニ[グシクン]チュ	兼城	カニ[グシ]ク	[ツ]
具志川の人	グッ[チャン]チュ	具志川	グッ[チャ]ー	[ツ]
島尻の人	シマ[ジリン]チュ	島尻	シマ[ジリ]	[ツ]
謝名堂の人	ジャナ[ドーン]チュ, ヤナ[ドーン]チュ	謝名堂	ジャ[ナ]ドー, ヤ[ナ]ドー	[ツ]
銭田の人	ジン[ジャン]チュ	銭田	ジ[ン]ジャ	[ツ]
鳥島の人	トウイ[シマン]チュ	鳥島	トウイ[シマ]	[ツ]
仲地の人	ナカ[チン]チュ	仲地	ナカ[チ]	[ツ]
仲泊の人	ナカ[ルマイン]チュ (OK)	仲泊	ナカ[ル]マイ	[ツ]
仲村渠の人	ナー[カノーン]チュ	仲村渠	ナー[カ]ノー	[ツ]
比嘉の人	ジャー[ムン]チュ, <m>[ヒガン]チュ	比嘉	ジャー[ム, [ヒガ	[ツ]
比屋定の人	ヒヤー[ジョ(ー)ン]チュ	比屋定	ヒヤ[ー]ジョー	[ツ]
真我里の人	マガ[イン]チュ (OK)	真我里	マ[ガ]イ	[ツ]
真謝の人	マー[ジャン]チュ	真謝	マ[ー]ジャ	[ツ]
山里の人	ヤマ[ザトウン]チュ, ヤン[ダトウン]チュ	山里	ヤ[マ]ザトウ, ヤ[マ]ザト, ヤン[ダ]トウ	[ツ]
仲里の人	ナカ[ザトウン]チュ	仲里	ナカ[ザトウ, ナカ[ザト	[ツ]
唐の人	ト[ーン]チュ, ト[ー]ンチュ, ト[ー]ヌチュ	唐(中国)	ト[ー]	[ツ]
島の人	シ[マン]チュ	島	シ[マ]	[ツ]
中国の人	[シナン]チュ	支那	[シナ]	[ツ]